

COSMOS集



白鳥の首

高橋 梨穂子*新 潟
「あすなる集」特選

こめつぶは真冬の水を吸いこんで真冬の白いごはんに変わる
あなたには天寿をまっとうしてほしいじゃがいもの芽を深めにえぐる
かかとか冷静になってゆくようだつめた床のキッチンにいて
白鳥の首ふとぶととニッポンの冬を吸いこむ今年の冬を
吐くための空気吸いこむ春を待つ田んぼになったような気持ちで

検 温

清 水 佑太郎*東 京

早朝の路面に張りたる薄氷 跳び越えて吐く息は白くて
登校の生徒の検温しておりぬ三人連続三十四度
室内用スリッパが持つ重要性やおら理解す三十五歳
雨よりも雪の方がマシなのです犬の散歩に限って言う
手ぶらでも次の二つは持っている、心と体 私の全部

赤 い 点 滅

富 永 恵美子*東 京

風と手をつないで風をあげる人 こころの深くを見つめている春

清 き 右 手

中 村 恵*鳥 取

「じゃないけど」結局じゃなくないけれど否定では始める主張が流行る
見ないふりしたのわたし シュレッダーつまりましたの赤い点滅
紙つまり見ないふりした数人のうちの一人を待つシュレッダー
ホームレスと呼んだそのとき乱暴にすべてを奪ってしまったような
うかつにもソファで寝入る昼下りびぎとからだに走る天罰
痛みいるからだ横たえ黄金の木乃伊のように正しくねむる
のり塩がついた左手そのままに清き右手はマウスに触れる
ストローを吸うだけのきみを録画して帰りのバスでくりかえし見た
雨降りに傘さしくれる夫のいて後半生にピチカートあり

人 の 記 憶

栗 三 誌 野*富 山

枯れ枝に雪の花咲く並木道夕日に光る真冬の桜
写真より記憶に残るほうが良い今でも青いフィレンツェの空
携帯が互いの孤独を繋ぎあう窓打ち付ける吹雪の夜に
幼子の頬に溶けゆく牡丹雪天よりの使者里に降り積む
それぞれに映画の筋を主張して人の記憶は十人十色

星 の ひ と つ

印 出 美由紀 神奈川

お調べの小鼓ポポと聞こえて能の舞台は地の果てとなる
止まるも舞ふも険しき(鷹姫)の増の面(おもて)にみいられてゆく
大きな海渡り来るとき曜変の茶碗に星のひとつ寄りしか
冬晴れに干せるシートに顔埋め陽の香風の香地の香を嗅ぐ
手のひらに媪がのせる補聴器は珊瑚の色にしづもりてをり

戦後ニッポン 前中 映 東京

神田川にみどりが見えてここからがぼくのいちばん好きな東京
行きに見て帰りに見る青鷺の首の角度がわづかにちがふ
人ならば喜寿と呼ばれる年齢なり戦後ニッポン深く老いたり
川ひとつくぐりしのちの地下駅に川の深さの階のぼりゆく
スマートフォンの会話を終へた中年が顎のマスクを口に戻しぬ

抗い中です 小 谷 優 香*鳥 取

真夜深く震うスマホに届きたる大き産声八人目の孫
プピパブと音する靴が序舎内あちこちはしるパパママはしる
窓口で主に添いて足元の盲導犬は凜と前向く
衰えに拍車がかかる六十代老いの一途に抗い中です
予定日を八日も過ぎたのんびりさんようやく会えた立春の朝

若狭の潮 内 藤 丈 子 福 井

しんしんと雪降りやまぬ越前に太郎と次郎の屋根の連なる
荒磯の東尋坊に詩碑ありて三好達治の愛した越前
水仙の花咲く里に風立ちて潮鳴りふいに近づく夕べ
たつぷりと若狭の潮を吸ひこめる寒の牡蠣食む三方五湖の夜
ご近所に子ども食堂開かれて蕪を二本引きて持ちゆく

これでいいの か 石 田 信 夫*鳥 取

コンピニの除雪の山の頂に登った犬が降りてきません
雪のふる骨正月の夕まぐれ鯉のあら汁の骨をしゃぶりぬ
母寝かせ今日も酒を呑むこれでいいの これでいいの

「節電で電力逼迫回避せよ」VS「オール電化生活」
スクラップ&ビルドをくり返し街はコンピニ老人施設

桜と豆雛 多 田 美慧子*宮 城

豆まきの豆を半分残しおき逃げぬ赤鬼と食べんか共に
色淡き啓翁桜のひと枝と豆雛を置ききさらぎの窓
明けきらぬ薄闇をゆく始発バスときに一人の乗客を乗せ
運行は最後となる路線バスドア開けたるまま長く停車す
伊豆沼の真雁は残り六万羽ニュースはききょうも北帰行伝う

リモコン 本 田 初 江 群 馬

カーリング(ロコ・ソラーレ)のチーム力甲高き声が館内に響く
カーリングのストーンのやうと菟藪筆を詠みたる友の顔がうかびぬ
失格の屈辱に耐へ高梨の小さき体が更にちひさし
スピードとスリル溢れるモーグルにわれは炬燵でぐつたりとせり
リモコンの分解をして埃とる器用な夫の太き指先

ヤカン沸騰 黒 川 典 子 愛 媛

石鎚の山の白雪かさ高くまだまだ春は近くにあらざ
公園に春来たるらし白蓮の白き卵のふくらみ始む
ぬくもりを胸のあたりに感じつつ歩ける道に水仙の咲く
ガラス戸の向かうに浮かぶ満月が姫りんこの枝に引つ掛かりをり
スキージャンプの声援にストープに掛けたるヤカンが沸騰し始む

雪 人 子 高 瀬 満由美*兵 庫

母は嫌い父が好みし汁かけ飯父に似たらし今朝も食みおり

油切れの体ギシギシよいこらしよちよと待つてねも少し待つてね
目が覚めてコーヒー入れたら昨晚のつらい思いがするりと解けた
幼き日ゴム跳びをした前庭はだれもいなくて雪ん子が舞う
店の間の大きな火鉢に焼きみかんの火箸持つ父やさしい手だった

春のリズム

丸山克介 鹿児島

「農を継ぐ」と少年畑より帰り来るズボン、長ぐつ土にまみれて
ひとりなる暮しにやうやう指の慣れ春のリズムに米磨ぎ始む
梅が枝を飛び交ふ目白一羽ゐて下見の役らしいつか去りたり
雪深き魚沼の田を思ひつつ耳たぶ赤く濁り酒飲む
老いてなほ少年のごと霜焼けの手指足指二十本痒し

上弦の月

石綿昌男 東京

節分を過ぎて花咲く春を待ち窓辺に小さきお雛さま飾る
小さくとも五人囃子も着座して窓辺に春が近づいてくる
昇りゆく太陽追ひかけ上弦の月が東に淡く現る
今朝の雪うつすら積り農園は白く覆はれ清らかにあり
貴重な練馬だいこん根は深く途中で折るるは残念無念

博多駅前

永田恵美 福岡

太宰府に梅見に行かうこのバスで一番早い蕾さがして
この冬に失くした歌集一冊をさがしてめぐる春寒の街
冬の日のココアを吹けば風花が舞ひくる私とメガネの間に
佐保嬢もチョコ煮てをらんバレンタインイブ甘やかな春の気配す
何人か口裂け女が混じつてる博多駅前マスキの雑踏
ジャイアンものび太もゐない公園で昔と同じ夕焼けを見る

たんぼ

木村マサ子 茨城

表札と鍵は大事に取り置きて自宅解体工事始まる
冬ざれの地に貼りつけてたんぼは最中に黄色の花を付けぬる
ほのぼのと任んでゐるとは言へざれど毎日なんとかホームに暮らす
ホーム内一〇一歳のYさんの姿の見えず 名札外さる

カタカタと地震なるかと思ひしにへリコプター二機上空を航く

胸張れる道

重永栄子 福岡

大空に飛びて一瞬止まるごと高き空舞ふ平野歩夢は
難聴のわれは気づかず葉の濡れて雨に落ちしや椿一輪
四人組女性の唄ふマイウェイよわれにありしか胸張れる道
けふの陽も昨日の角度の午後の四時何もせずして日は暮れてゆく
短歌作る昼いつばいはわれの刻電話は留守です緊急用です

眉間尺

栢弘子 山口

久びさの雨に梅花は呼応するごとく開けり白すずやかに
父の植ゑたる椿の品種いまに知る(眉間尺)とふ赤き大輪
みの虫の軽き袋はふうはりと梅の古木にゆれてゐるなり
白じろと苔をまとへる梅の木若き枝先つぼみをふふむ
心ひもじきときはいつも口に出づ江戸子守唄をうなのくだり

三回転

小関八重子 山形

軽々とボールのごとく投げられて氷上にすくと選手は立ちぬ
スノボーで雪の壁をも屋根の上もとびこえて行く忍者のごとく
手がすべり失敗したかと思はせて肩をつかみぬフィギュア選手は

「すごいやあ、すごいやあ」をば連発しオリンピックみる雪降りしきる夜
青空を背に高く高く三回転しておりてくるスノーボー選手

退院 仕度 地庵 道子 和歌山

病院のベッドで迎へし新年も何時の間にやら如月なかば
ドクターの白衣まぶしき回診も今日で終りて退院仕度
食べる物制限されるも色々と自分で作る楽しみはあり
ひとつ知りひとつ忘れて行く老の辞書をかたへにうたを詠みつぐ
久々に夫と旅する夢をみて覚めてひと時余韻にひたる

昭和の正月 吉田 静子 長崎

年の暮れ餅つく音の威勢よき男衆らの姿まぼろし



「その二集」特選

謎のエナジー 清水 美里*東京

聴診器手で温める朝イチの診療なれば医師は優しい
ひびいたたままゆでられたゆで卵剥けば斜めにかっこいい傷
寝いても謎のエナジー帯びており闇に逆立つ吾子の黒髪
ヒヤシンスクロッカス水栽培に仕立て可視化する春の接近
休み時間だけはマイクをオンにして声聞かせ合う一年二組の子ら

晦日より何処の家でも門松を立てて迎へし昭和の正月
正月は羽根つき毬つき独楽回し友らと終日遊びふけにし
のびのびし上棟式の漸くに一月五日すます餅なげ
水仙の咲きたる庭を駆けめぐりし昭和の子供ら逞しさありき

妻の寝顔 橋本 武則*大阪

感慨をあまた抱きて雪深き除夜の鐘きくわれら兩人
薄ら氷のはかなきかなや昇る陽にきらめきつも融け失せにけり
斜にさせる光の中に朝餉なる紅茶の湯気のゆらぎを愛す
冬没日たちまち空を燃え立たせ紅充ちて風鳴るをきく
寝覚むれば夜のしじまの中に居て妻の寝顔の白く浮き出づ
ねこやなぎ花穂円かに耀かせ春立つ朝を迎えいるなり

鳥の足首 大池 アザミ*兵庫

ワクチンを打つ前の人集められ四角い部屋にコの字に並ぶ
日が長くなってなんだかつまらない追いたてられるように帰りたい
散らばった本や新聞かさねればテーブルだつてこんな広い
誰ひとり知人のいない街に来て手足が伸びる心地で歩く
干上がった水路が春を待っている鳥の足首羽に埋もれて

同じ山道 長瀬慶一郎*福島

失敗をいたわる心ドンマイとオリンピックの女神ほほ笑む
あと数秒こらえていれば金メダル本人つらいが堂々の銀
娘らの卒業旅行は懐かしき思い出とならむ 行つてらっしゃい
後継ぎを強いることなく親も子も同じ山道ゆつくり登る
阿武隈の強い乾燥風止まず立春すぎて梅の咲くころ

雪解けの水 池戸豊次*岐阜

ドクドクと動脈のごと聞こえる雨樋伝う雪解けの水
暖かい今日は妙に暖かい厳冬の隙間の貴重な一日
山水の管が凍って水途絶え池の鯉達死んでしまふ
雪だるまひとつふたつは出来そうな積もり具合と外を眺める
冬の日の光集める古椅子に寄り添い眠る猫の親子よ

雪のほひ 谷川恵崎玉

臥せりがちのベッドに乗りて網戸越しに雪のほひをすんと嗅ぎたり
雪積もる朝のトタン屋根のいる粉砂糖まぶしたチョコレートいろ
歩道橋に上ればもつと遠ざかる白さはだつ午後四時の月
ヴァイオリンケース開ければ冬の風 楽器をそつと磨いて仕舞ふ
ヒーターの首振り見つめる昼下がりとろんとろん瞼はゆらぐ
学校では会へない友に一度きり借りたローラースケートの記憶

赤勝負服 石本洋子佐賀

朝五時に目覚める夫はすることのほかには無くて味噌汁を炊く
着飾りて初宮参りの母と兎に声をかけたり他人にあれど

川沿ひの桜並木の下に咲く水仙は地味冬日浴びても
ラブソングたつぷり聴きて眠る夜は顔のバックも抜群に効く
回転椅子右に廻して見る空はだいたい色の帯の夕焼け
もう捨てる、けふは捨てると思へども決行をせず赤勝負服、

ハッピー 松岡綾子香川

大寒にくれなるのストックふと香る水をやりたるお札のやうに
採りきれず旬を過ぎたるスダチの実冬枯れの庭朱く彩る
五年前の研究授業案削除五分刻みの緊張の消ゆ
呼ぶたびに幸せ口からあふれ出すやうに名付けた仔犬のハッピー
梅の香をまだ知らなくて震へをり仔犬のハッピー初の外界

月が咲く 奥呂美生東京

あざあざとイイギリの実は空に映え冬ざれの野を風ふきわたる
初音とふ椿一輪けさひらきその音きかむと花に耳寄す
朝まだきいまだともれる外灯が等かんかくに川面にゆれる
ここからは臘梅の木に月が咲くそんなふうにも見える清水橋
佐助をひろひてまるくならべある下校途中の子らにぎははし

パンが焼けた 芝崎千鶴*和歌山

カレンダー今年初めて剥ぎとれば庭の白梅一輪ひらく
目覚めれば鳥のさえずり聞こえてパンが焼けたと夫の声する
ラッキートとアンラッキートが交錯すオリンピックは人の世と同じ
カーリング選手のおやつは梅干なりうれしく聞けり紀州人われ
雪の朝パパとそろいの毛糸帽となりのハルくん散歩に出てる

今の世の光

木村 つや子*奈良

奈良の地に帰りて植えし柚子の木よ七年経ちて金の実十個
ふるさとで米作りする弟にいたたく新米うまいまいぞ
花言葉「長寿」とぞいう銀杏を良く食べる母は九十二歳

好きだった袖で作るワンピースああ今の世の光を当てる
送られきし名店「すや」の栗きんとんわが口のなか秋が広がる

クラス閉鎖

小森 鈴子 岐阜

ソファー蹴り登校できぬを怒りたり妹のクラス閉鎖を聞く兄
兄のクラス閉鎖と知りてあたふたと今日買ひにゆく食料・水・紙
一センチの都心の雪をキャスターが歩みて報ず思はず笑ふ
温風にタオルの揺るるわがへやに早く目覚めて『秋夜吟』読む
古き家みな石垣を積み上げて坂を持ちあふる輪中の村は

体重計

日野 幸吉*広島

手袋しスマホで音楽聞きながら二拝二拍手一礼するも
いくたびも足を置く場所変えながら乗り降りしたり体重計に



顎ひきて背筋伸ばして直立す徴兵検査のごとく測られ

明日あると寝ねし若き日過ぎゆきて明日はなきかと寝られぬいまは
カノープス祀りて福寿祈るらし神の座します冬の夜の星

湯たんぼ

伊藤 てい子*北海道

子のリュックに湯たんぼ入れて抱いて寝るゆたんぼまた春遠い
愛された愛したことももう臚ふりかえりみれば空は夕焼け
飲み会はリモートだもの楽しい話呑んで笑つて地酒の自慢
音のない雪の降る朝窓の外をのぞいているのは私のパジャマ
ひと冬をルームシェアした朝顔は朝昼咲いて珍種とならむ

ヤドリギ

池田 あつ子 愛知

冬枯れの榎の枝の抱へる常葉とこはの球体あれはヤドリギ
裸木の枝にしつかと食らひつき樹上のヤドリギ強かに生く
高枝に冬陽くまなく浴びながらヤドリギ丸くまるくふくらむ
冬の陽を満タンにしてヤドリギの緑の風船ふはりと浮かぶ
地に降りることなく生きて足よりも翼欲しがるヤドリギさやぐ

湿原

稲吉 裕子*愛知

ゴンドラとロープウェイを乗り継ぎて一九〇〇米の梅池に立つ
ゆるやかな勾配に沿う木道を踏みしめゆかな「秋」の湿原
ダケカンバの幹は大きく撓みいて積雪深さを推し測りたり
草もみじとくに終わりし木道に腰をおろしてにぎり飯食む
ワタスゲ湿原白き穂絮のかけもなく池塘しずかに冬へ入りゆく